はじめに

「人の気持が変わらない限り外は歩けないよ」と、ある障害者は言っている。

「横浜市民」といえば、一般的にはこれまで、横浜に住んでいる人を意味してきた。横浜には、いま、さまざまな活動をしている多くの人びとがいる。生活の本拠がある人、昼間、横浜で活動している人、企業活動をしている（法）人、外国籍の人、買物、レジャー、観光で横浜を訪れる人などである。横浜を舞台に、横浜で活動しているこれらの人たちを『よこはまの市民』と呼んでみよう。

市民をとりまく環境は、低経済成長の時代に入り、かつてとは異なってきている。市民生活はある面では前進し、豊かになった。しかし、都市基盤整備の遅れなど高度経済成長期から引きつがれている多くの問題をかかえている。また、高齢化の進展や市民の価値観の多様化などに伴う新たなニーズへの対応が求められている。

横浜は、大都市という巨大な生きものである。内外との複雑なかかわりのなかで、生きている。変化する環境のもとで、成長、発展していくためには、たえず活力をうみだしていく必要がある。活力の源となるのは、市民一人ひとりの活動である。すべての市民の力が十分発揮され、横浜全体に反映されていくことが欠かせない。それには、まず、さまざまな市民が自分たちの利害を越えて、互いを理解し、認識しあい、共に生きるという「共生」の基本にたつことが大事であろう。

共生のもとに、市民が連帯し、市民の力が結集されていく。市民の連帯をもとに、都市の活力を高めていくことが、横浜を再生させ、豊かな市民生活を実現していくカギとなろう。

ある障害者の声は、「共生」が必要であることを訴えている。